Key Leader's Voice

EFO SELECTION

サステナブルな地域創生とDX

元野球日本代表「侍ジャパン」監督
栗山 英樹
Hideki Kuriyama

2023年7月21日、『サステナブルな地域創生とDX』をテーマに日立製作所主催のイベントが開催された。ゲストは、2023「World Baseball Classic™」において「侍ジャパン」を優勝に導いた元日本代表監督の栗山英樹氏。Lumada Innovation Hub Senior Principalの加治慶光が進行を務めた本講演の模様をお届けする。

夢をかなえるフィールド

WBCを終えて

加治 司会進行を務めますLumada Innovation Hub Senior Principalの加治慶光と申します。このイベントは、お客さまやパートナーさまと日立グループが持つ多様な知見を、素早くかつ継続的に掛け合わせて協創する場「Lumada Innovation Hub Tokyo」からお送りします。それでは、本日のゲストにご入場していただきたいと思います。今年のWBCで「侍ジャパン」を優勝へと導いた元日本代表監督、栗山英樹さんです。拍手でお迎えください。

栗山 皆さん、こんにちは。よろしくお願いします。

加治 栗山さんに関してご紹介の必要はないと思いますので、早速進めてまいります。まず、なんといっても日本中が熱狂し、感動したWBCのことについてお話を伺います。WBCを終えた今、あの時の感想と、この先どのようなことを考えておられるのかを聞かせていただけますか。

栗山 おかげさまで、僕はあまり何もしていなかったのですが、選手たちのがんばりでWBCという舞台を勝ち切ることができました。たくさんの応援、本当にありがとうございました。大会がはじまる時、あれだけの一流選手たちが集まって一緒に戦うということがどういう感じなのか想像が付かないというか、僕もはじめてなので正直よくわからなかったです。しかし最終的には選手たちが、自分のことを捨ててチームのため、日本のために本当に全力を尽くしてくれました。その姿は僕も一緒にいて心から感動しましたし、その感動は同じように多くの人に伝わるということを感じながら戦っていました。

今は野球への感謝を含めてやらなければならないこと、そして自分のやりたいことの二つがあるのですが、具体的には何も決めていなくて非常にモヤっとしています。いつもそうなのですが、何かが決まる時には自分の中でストンと落ちる瞬間が来るので、それを待っている感じです。

『フィールド・オブ・ドリームス』がくれた新しい夢

加治 皆さんは栗山さんがWBCの監督ということは良くご存じだと思いますが、2002年から北海道夕張郡栗山町に移住されていることは知らない方が多いのではないでしょうか。今日はテーマが「サステナブルな地域創生とDX」ということで、持続可能な地域創生について栗山さんと栗山町をモデルに探っていきたいと思います。そもそも、この栗山町に移住されるようになったきっかけは何だったのでしょう。

栗山 『フィールド・オブ・ドリームス』*という映画があります。1990年に僕が引退を決める要因になった映画なのですが、現役を退いて取材者として野球と関わっている時に、この映画のモデルになったアメリカのアイオワ州の球場を訪れる機会がありました。そこではアメリカや日本、台湾などいろんな国や地域の子どもたちが遊んでいて、僕はそれをぼんやり見ていました。すると子どもたちは急に二つに分かれて、野球の試合をはじめたのです。

イベントはLumada Innovation Hub Tokyoで行われた

その時、何かすごく感じるものがあったのです。子どもは環境さえしっかりと用意してあげれば、言葉や国籍や年齢など関係なくみんな人として正しい方向に進む、ということがスッと理解できた。それからは、日本にそういう場所を作ることが僕の夢になりました。

仕事で日本の地方に行くたびに、土地を探しました。しかし僕の自己資金は限られていて、もう全然足りなくて、やっぱり無理なのかなと思っている時に、たまたま栗山町の青年会議所の青年が栗山という名字の人を集めたイベントを企画し、その相談で僕の事務所を訪ねてきたのです。その人に、「ところであなたの町に野球場は作れませんか」という話をもちかけたことが栗山町との出合いです。

加治 今のお話だけでもすごくわくわくしますが、そこからどんなふうにその町の方たちと人間関係を作っていかれたのですか。

栗山 実際に僕も見に行ってみると、栗山町はコンサドーレ札幌の練習場がある町で、若い人たちにすごく行動力があって、僕も30代でしたから夢をこんこんと語るとみんな真剣に聞

＊『フィールド・オブ・ドリームス』（原題：Field of Dreams／1989年／アメリカ）：トウモロコシ畑で不思議な声を聞いた一人の農夫は、畑の真ん中に野球場を作り始める。K・コスナーの主演で大ヒットした名作ヒューマンファンタジー。

All Rights Reserved, Copyright ©2023, Hitachi, Ltd.

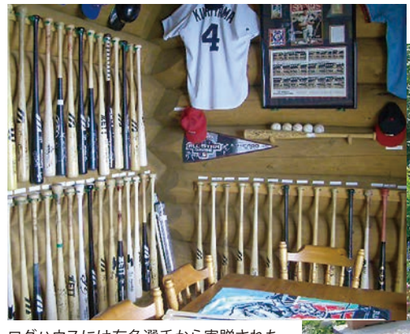
いてくれました。しかも町を歩くと、栗山町役場とか栗山警察署とか栗山駅とか、もう自分の名前があちこちにあって、「これこそおれの町だ、ここしかない」と直感しました。

町の人たちとは、戦略とか計画なんてまったくなしで、もう裸のまんま僕の思いを話すだけだったのですが、なにかひとつ思いを語ると「ここならできるかもしれない」とか「これなら僕が手伝えます」とすぐに行動してくれました。そんな腹を割った付き合いの中で、少しずつ人間関係が広がっていった感じです。

栗の樹ファーム

加治 ありがとうございます。では実際にスライドで「栗の樹ファーム」を紹介していただきましょう。

栗山 誰もが遊べる天然芝の野球場、これが「栗の樹ファーム」です。いろいろな大会が自主的に開催されていて、時々僕も一緒に遊んだりしています。作った頃は、僕も若かったですね。


ログハウスには有名選手から寄贈された野球道具が展示されている

栗の樹ファームにあるログハウス

このログハウスは、イチロー選手や松井秀喜選手たちから送ってもらったバットやユニフォームが展示してあります。博物館とは違って、実際に手で触って振ることもできるオープンな場所です。バットやグローブも用意されていて、いつ誰と来ても野球で遊べるようになっています。

映画『フィールド・オブ・ドリームス』のような観戦用ベンチ

このベンチ、見た方ならわかると思いますが、まるで『フィールド・オブ・ドリームス』みたいですよね。映画の中でも重要なシーンでベンチが使われていて、僕は町の人たちとお酒を飲んだ時にそんな話をよくしていました。そしてある朝起きたら、そこにこれがあったんです。しっかりと土台に据え付けてあって、安全性も考えられている本格的なベンチです。でも、誰が作って置いて行ったのかはわからないのです。私が作ったとか、おれが手伝ったとか、誰も名乗らない。だから僕も、あえて誰が作ったのかは探りません。みんながくれたプレゼントだと思っています。これが、僕と栗山町との長い付き合いの中で育まれた「関係性」なのかもしれません。

加治 素敵なエピソードをありがとうございます。たぶん、地域創生ということ以前に、栗山さんは自分でここに遊び場を作って楽しみたいという思いが、情熱の核にあるということですね。

栗山 おっしゃる通りです。

倉本聰氏からのプレゼント

加治 『フィールド・オブ・ドリームス』では、「君がそれを作れば、彼は来るだろう」という言葉がキーワードとして出てきます。このLumada Innovation Hub Tokyoもそういう発想で作った場所になっていまして、いろいろな方が集まることで新しい協創、イノベーションを生み出そうという目的でご利用いただいています。栗山町は、先日のパレードではまさにすごい数の人が集まりました。

栗山 人口が1万1000人から1万2000人といわれている町に1万4000人という人が集まりました。これはがんばった選手や日本野球へのご褒美だと思います。実はこんな大騒ぎになるなんて想像もしていなかった昨年、10年間続いた日本ハムファイターズの監督を辞めた僕に、『北の国から』の倉本聰先生から、「10年間北海道のためにお疲れさま」と100本の栗の樹の苗木をいただきました。先生はわざわざ仲間と一緒にここまで届けにきてくれたのです。

その時「栗の樹ファーム」を見ていただき、食事をしながらいろいろな話を伺いました。その時に先生は、「人が生きていくためには何が必要なのか、ちゃんと考えて欲しい」と言われたのです。先生は塾生に、シラカバの樹の葉っぱの数を実際に数えさせるそうです。一本のシラカバに何万枚の葉がある。この何万枚もの葉を作る自然があるから、水ができる。そんな先輩の残してくれた自然の大切さがわかれば、自分が次にどんな行動を起こせばいいのか、次の世代に何を伝えなければならないかわかるはずだ。

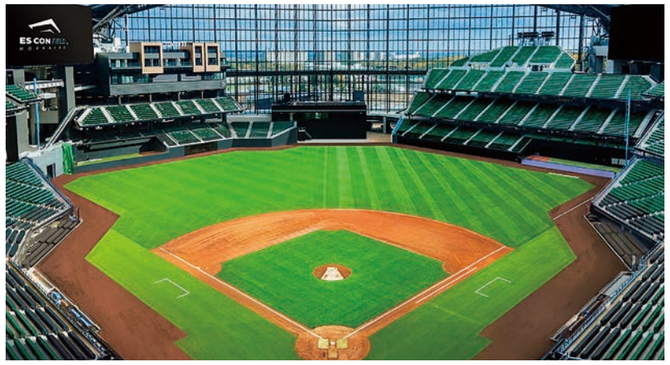
『北の国から』でも、先生はそれを伝え残そうとされたのだと思います。地域創生やサステナビリティに僕が答えを持っているわけではありませんが、縁あってできた「栗の樹ファーム」が、そんな教えを受けたり、助け合ったり、環境を整えるために人と人が手をつなぐ場になればいいと思っています。

すべての基本は人作り

地域創生の新拠点『エスコンフィールドHOKKAIDO』

加治 今年の3月、北海道の地域創生の新しい拠点として『エスコンフィールドHOKKAIDO』がオープンしました。栗山さんも関わっておられるということですが、この施設について解説いただけますか。

栗山 これは僕が監督になった時から、北海道日本ハムファイターズには野球場を核にしたスポーツの拠点となる新しい施設を作りたいというビジョンがありました。2023年、その夢がついに実現したのです。皆さんも機会があればぜひ一度訪ねてみて


敷地面積 約5ha、収容人数 最大約3万5000人の『エスコンフィールドHOKKAIDO』

加治 慶光 かじ よしみつ

株式会社 日立製作所 Lumada Innovation Hub Senior Principal。シナモンAI会長兼チーフ・サステナビリティ・デベロプメント・オフィサー（CSDO）、鎌倉市スマートシティ推進参与。青山学院大学経済学部を卒業後、富士銀行、広告会社を経てケロッグ経営大学院MBAを修了。日本コカ・コーラ、タイム・ワーナー、ソニー・ピクチャーズ、日産自動車、オリンピック・パラリンピック招致委員会などを経て首相官邸国際広報室へ。その後アクセンチュアにてブランディング、イノベーション、働き方改革、SDGs、地方拡張などを担当後、現職。2016年Slush Asia Co-CMOも務め日本のスタートアップムーブメントを盛り上げた。

栗山 英樹 くりやま ひでき

1961年、東京都生まれ。東京学芸大学を経て、1984年にヤクルトスワローズに入団。1989年ゴールデングラブ賞を獲得。1990年に現役を引退した後は解説者として活躍するかたわら少年野球の普及に努め、2002年には名字と同じ町名の北海道栗山町に同町の町民らと協力して少年野球場「栗の樹ファーム」を開設。2004年からは白鷗大学でスポーツメディア論などの講義を担当した後、2012年からは北海道日本ハムファイターズの監督としてチームを2度のリーグ優勝に導き、2016年には日本一に輝く。2021年、野球日本代表監督に就任。2023年、WBCで優勝。現在、北海道日本ハムファイターズプロフェッサー。

7月2日 開閉式屋根を開けて行われた公式戦「THE FIRST ROOF OPEN GAME」

ください。僕は世界中の野球場を数多く見てきましたが、現時点ではこの球場が設備も環境も世界一だと思います。

まずここは、日本ではじめての開閉式屋根付き天然芝の球場です。ファンファーストとプレイヤーファーストの両立をめざした設備は、訪れた人にもプレーする選手たちにも気持ち良くなっていただけるような配慮が施されています。たとえば360度回遊できるコンコースや球場を望むホテル、フィールドが一望できるブルワリーレストラン、世界最大級の大型ビジョンなど、見所が満載で野球がない時でも楽しめる球場です。

選手にとっても、ベンチ裏にバッティングマシンがあって試合中でも球を打って練習ができるとか、最高のパフォーマンスを発揮するための設備が整えられています。ここは本当にファイターズ関係者の夢や思いがぎっしりと詰まった場所なのです。

『エスコンフィールドHOKKAIDO』があるところは、北海道の北広島市というまだまだ自然が多い街ですが、これからこの球場を中心に街が発展し、地域創生のモデルケースになって欲しいと願っています。例えばアメリカの場合、アリゾナの何もないところにまず野球場とキャンプ地を作る。そこを中心に街が作られて、10年後には本当に見違えるような素晴らしい街に発展していたりします。これを北広島で実現して、日本全国に展開させたい。

僕は日本全国47都道府県に2軍の球場を作って、47の2軍のチームを作るという夢を持っています。そこで子どもたちもプロをめざして練習をしたり、大会を行えるような環境を勝手に夢見ていて、自分でも発信したりしていますが、『Fビレッジ 北海道ボールパーク』と『エスコンフィールドHOKKAIDO』はそんな地域創生の象徴的な球場だと思います。

加治 ありがとうございます。今日は地域創生がテーマですが、地域創生にはブラウンフィールドとグリーンフィールドという概念があります。ブラウンフィールドっていうのはすでに街ができてしまっている地域で、何もない更地の地域がグリーンフィールドです。

栗山さんが作られた「栗の樹ファーム」もこの『エスコンフィールドHOKKAIDO』も、グリーンフィールドに新しい街をゼロから作るという試みです。重要なのは、何もないグリーンフィールドに未来を描ける人の存在です。その人がいるから、地域の人たちが共感し、協力し合いながらまち作りを積み重ね、地域創生が広がっていく。栗山さんは、そんな未来を見ることができる稀有な人だということがよくわかりました。

チーム作りもまち作りも、すべては〝人作り〟から

加治 栗山町では住民として、北広島市では北海道日本ハムファイターズのプロフェッサーとして地域創生と取り組まれている栗山さんが、その活動で一番大切にされていることは何でしょう。

栗山 僕は球団の関係者として『エスコンフィールドHOKKAIDO』のような環境作りもお手伝いしていますが、最後はやっぱり「人作り」だと思っています。結局人が育たないと、何も生まれないのです。僕は監督を辞めたときに、2軍に入ってきた選手たち一人ひとりと1対1で話をしました。それは何かを教えるとかではなくて、彼らの話を聞いて一緒に将来のことを考えるということを面と向かってやるのです。これが、僕はすべての基本だと思っています。

加治 その栗山さんの人との接し方は、WBCの選手たちであれ、地域で活動する人たちであれ、共通するところですか。

栗山 はい、おっしゃる通りです。僕は侍ジャパンの選手たちに最後にお願いしたことは、「あなたたちは侍ジャパンの一員だと思わないでくれ」ということでした。日本代表を会社で例えると、選手には会社の一員ではなくその会社の経営者だと思って欲しかった。チームの一員というマインドだと、自分がやらなくても誰かがやってくれるだろうと思ってしまいがちです。でもその意識で経営はできないし、他人事だと思っている人間に誰かを巻き込むことはできません。

侍ジャパンの時にもそれを伝えたし、「栗の樹ファーム」を作る時にも町の人たちとそういう話をしました。チーム作りでもまち作りでも、「他人事にしないで、自分たちでやろうぜ」という姿勢はまったく同じだと僕は思います。

加治 何かを成し遂げるためには、何より当事者意識が大切だという今のお話は、本当におっしゃる通りだと思います。そのマインドを持ってもらうために、マジックや簡単な方法はなくて、誠実に1対1で話をするということですね。

栗山 はい、本当に真心をまともにぶつけ合うことしかないと思います。

加治 ありがとうございます。それでは最後に、本日参加されている皆さんは、新しい変革を起こそうと日々苦労されている方々だと思います。そんな皆さんに、ぜひ栗山さんからメッセージをいただければと思います。

栗山 今日は栗山町のことや北広島市のことを少し偉そうに話してしまいましたが、地域の人たちが将来幸せになるビジョンや方法を考えるというのは、本当に難しいことだということは僕も実感しています。簡単にはできないから、皆さんが苦労され、努力されているのだと思います。だから、何事も最初から「難しい」と思って構えておくことがいいのではないでしょうか。

プロ野球の一流の選手は、できないということをまったく意識していません。彼らに「これはできないです」という発想はなくて、今はできないだけでいずれできるようになる。そういう意識の人間が一流になっていくのです。とにかく最初は何でも「難しい」。でもいずれは乗り越えられるし、乗り越えた時に大きな喜びが味わえるので、皆さんもそれを信じて日々の仕事をがんばってください。

記事の続きをWebマガジン「Executive Foresight Online」に掲載しています。

【第3回】
社会課題に向き合うマネジメントの知恵 その1
「女川プロジェクト」で実際に地域創生を進めている日立製作所と日立システムズの3名と、栗山英樹氏、加治慶光によって行われたパネルディスカッション。その1は3名の自己紹介と役割について。

【第4回】
社会課題に向き合うマネジメントの知恵 その2
企業からの一方通行ではなく、地域の方たちと一体になった課題解決を実現するために、デザイン思考で進められている「女川プロジェクト」。現地では、どのように進められているのか。そしてその実践は。

【第5回】
社会課題に向き合うマネジメントの知恵 その3
地域創生を一過性ではない取り組みとするために、企業はそれを持続可能なビジネスに育てる必要がある。現地で取り組んだからこそ見えてきたその可能性、現実として立ちはだかる壁とは。